



てきすとぽい杯

VOL

10



<http://text-poi.net/>

# 目次

---

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第10回 募集要項

第10回 審査結果

入賞作品紹介

## 《大賞》

『完全体サイボーグ』 丁史ウイナ 獲得☆ 4.333

## 《入賞》

『プラントハントランド』 犬子蓮木 獲得☆ 4.300

『失われた古代文明※遺伝子組み換えでない』 碧 獲得☆ 4.200

『魔女狩り』 Wheelie 獲得☆ 4.182

〈候補作品〉 ※得票順

『私の愛しの』 晴海まどか 獲得☆ 4.091

『目の前にいる頭のおかしな男のことをいちいち写真には撮らない』 ひこ・ひこたろう 獲得☆  
4.077

〈アイロニカル TSUTSUI 賞〉

『発酵人種』 ayamarido 獲得☆ 4.000

『ぼくとフィルムと発酵と』 豆ヒヨコ 獲得☆ 4.000

『滅亡の日』 伊守梟 獲得☆ 3.900

『仮面パンダー -序-』 茶屋 獲得☆ 3.900

〈著者名で賞〉

『有罪無罪?』 うわあああああ 獲得☆ 3.667

『3D プリンタ 2113』 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.500

『印象が大事』 志菜 獲得☆ 3.500

『さらば、第三惑星』 しゃん 獲得☆ 3.455

〈番外作品〉 ※投稿順

〈時間オーバーも何らかのトリックで賞〉

『趣味は意外な形で身を助ける』 [るぞ](#) 獲得☆ 4.222 (制限時間後に投稿)

『神の水』 [永坂暖日](#) 獲得☆ 4.000 (制限時間後に投稿)

〈関連作品〉

[関連作品のご紹介](#)

終わりに

[終わりに](#)

[てきすとぼい広告](#)

[奥付](#)



「てきすとぼい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぼいは、2012年2月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集うWEB作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013年1月より てきすとぼい主催の競作イベント「てきすとぼい杯」を開始いたしました。



「てきすとぼい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぼい杯は、制限時間1時間+推敲15分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

### 第10回てきすとぼい杯

会場 : <http://text-poi.net/vote/35/>

お題 : 三題「発酵」「狩り」「フィルム」

これらの言葉を、タイトルまたは本文で使用してください。

投稿期間 : 2013年10月18日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013年10月19日 0:00 ~ 2013年10月27日 24:00

投稿期間中のTwitterまとめ : <http://togetter.com/li/578752>

第 10 回は、約半年ぶりの平日・金曜日開催となりましたが、初参加の作家さんお一人を含む、計 16 作品をお寄せいただきました。

## 第10回募集要項

---

### 【投稿について】

投稿期間：

10月18日（金）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間1時間の中に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとぼい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/35/>

てきすとぼい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より1時間で執筆、その後15分で推敲&投稿してください。

締切は同日23:45頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

### 【審査について】

審査期間：

10月19日（土）0時 ～ 10月27日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとぼいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。

個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

## 第 10 回審査結果

---

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1 位 ☆ 4.333

『完全体サイボーグ』 丁史ウイナ

<http://text-poi.net/vote/35/11/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:43

総文字数 : 2739 字

2 位 ☆ 4.300

『プラントハントランド』 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/35/7/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:37

総文字数 : 2835 字

(番外) ☆ 4.222

『趣味は意外な形で身を助ける』 るぞ

<http://text-poi.net/vote/35/15/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:45 最終更新: 2013.10.19 00:17

総文字数 : 2818 字

3 位 ☆ 4.200

『失われた古代文明※遺伝子組み換えでない』 碧

<http://text-poi.net/vote/35/12/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:43

総文字数 : 1898 字

4 位 ☆ 4.182

『魔女狩り』 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/35/10/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:43

総文字数 : 842 字

5 位 ☆ 4.091

『私の愛しの』 晴海まどか

<http://text-poi.net/vote/35/9/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:42 最終更新: 2013.10.18 23:45

総文字数 : 3103 字

6位 ☆ 4.077

『目の前にいる頭のおかしな男のことをいちいち写真には撮らない』 ひこ・ひこたろう

<http://text-poi.net/vote/35/1/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:12 最終更新: 2013.10.18 23:17

総文字数 : 1745 字

7位 ☆ 4.000

『発酵人種』 ayamarido

<http://text-poi.net/vote/35/5/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:29 最終更新: 2013.10.18 23:41

総文字数 : 2627 字

8位 ☆ 4.000

『ぼくとフィルムと発酵と』 豆ヒヨコ

<http://text-poi.net/vote/35/14/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:44 最終更新: 2013.10.18 23:48

総文字数 : 1681 字

(番外) ☆ 4.000

『神の水』 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/35/16/>

投稿時刻: 2013.10.19 01:37

総文字数 : 3892 字

9位 ☆ 3.900

『滅亡の日』 伊守梟

<http://text-poi.net/vote/35/4/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:28 最終更新: 2013.10.18 23:39

総文字数 : 1385 字

10位 ☆ 3.900

『仮面パンダー -序-』 茶屋

<http://text-poi.net/vote/35/2/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:15 最終更新: 2013.10.18 23:17

総文字数 : 1527 字

11位 ☆ 3.667

『有罪無罪?』 うわああああああ

<http://text-poi.net/vote/35/3/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:27 最終更新: 2013.10.18 23:32

総文字数 : 2218 字

12 位 ☆ 3.500

『3D プリンタ 2113』 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/35/13/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:44

総文字数 : 1268 字

13 位 ☆ 3.500

『印象が大事』 志菜

<http://text-poi.net/vote/35/8/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:42

総文字数 : 1106 字

14 位 ☆ 3.455

『さらば、第三惑星』 しゃん

<http://text-poi.net/vote/35/6/>

投稿時刻: 2013.10.18 23:37

総文字数 : 1076 字

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/35/>

《大賞 1 作品》

---

獲得☆ 4.333

『完全体サイボーグ』

<http://text-poi.net/vote/35/11/>

著：丁史ウイナ

100%機械化されたサイボーグは、人間なのかロボットなのか？  
ヒトを襲わないとされていた完全体サイボーグが、しかしある時……。  
――アシモフの時代からの定説であるロボット三原則に、新解釈を加える、  
手に汗握る濃厚SFアクション掌編。大賞おめでとうございます！

《入賞 3 作品》

---

獲得☆ 4.300

『プラントハンランド』

<http://text-poi.net/vote/35/7/>

著：犬子蓮木

“プラントハンター”のミギルカと、その相棒、オウムのカレハ。  
とても珍しい植物を“狩る”ため、とある島に上陸した彼らは……。？  
どこかほのぼのとした幻想世界と、機知とユーモアに満たされた会話が心地よい、  
一人と一匹の冒険活劇です。

獲得☆ 4.200

『失われた古代文明※遺伝子組み換えでない』

<http://text-poi.net/vote/35/12/>

著：碧

そんなおじいさんと、探すよりとにかく自分で作って試してみたい年頃の孫との、  
ちょっと楽しくてちょっと噛み合わない日常を描いた、新感覚の祖父孫譚。  
スピンオフ賞で☆5パーフェクト達成の、後日談もお勧めです！

---

獲得☆ 4.182

『魔女狩り』

<http://text-poi.net/vote/35/10/>

著：Wheelie

ある時、父親が娘に見せた、製作途中のショートフィルム。  
魔女の力をめぐる、その短い映像に隠された意味とは……？  
父親の真意を想像せずにはいられない戦慄の物語構造が、高い評価を獲得しました。

《特別賞》

---

《アイロニカル TSUTSUI 賞》

『発酵人種』

<http://text-poi.net/vote/35/5/>

著：ayamarido

素朴な人々の、素朴さと俗っぽさを皮肉な視点で描いた、ユーモラスな作品でした。

---

《著者名で賞》

『有罪無罪？』

<http://text-poi.net/vote/35/3/>

著：うわああああああ

意図してか偶然か、結末が著者名で締められる希少な作品でした（詳しくは作品でご確認ください）。

---

《時間オーバーも何らかのトリックで賞》

『趣味は意外な形で身を助ける』

<http://text-poi.net/vote/35/15/>

著：るぞ

残念ながら制限時間外となってしまいましたが、  
巧妙に練り上げられたミステリー作品で☆ 4.222 の高評価を獲得しました。

——受賞された皆さま、おめでとうございます！  
素晴らしい作品をありがとうございました。

(次のページから、作品が始まります。)

《大賞受賞作品》  
完全体サイボーグ  
丁史ウイナ

ロボットの集会的無意識——といえば聞こえはいいが、それは単に、「ロボット三原則はもう古い」という危険極まりない言辞に対する抑制策のようなものでしかない。

時の流れとともに人間の体には「代替」が利くようになっていた。はじめは労働力の代替、すなわち人間が椅子に座っている間に、無機質なロボットが作業をこなしていたものだ。ところが次第に、代替というものは人間の体、文字通り体そのものを欲するようになった。義足、義手、視力を保った義眼、皮膚の代わりとなる保護フィルム、血流循環器……、それらははじめこそ、人間の作業効率を補うにとどまっていた。

サイボーグとアンドロイドの違いが曖昧になったのは、ほんの数年前のことだ。人間の体一部を、改造し機械に代替するのがサイボーグ。はじめから人間ではなく人工的に作られた人間型ロボットがアンドロイド。それらは原初に「人間」が介しているか否かにおいて、けっして混同することのないカテゴリにあるはずだった。

しかしほんの数年前に、境界線は踏み越えられる。体のすべての部分を、機械に代替した人間が現れたのだ。腕と脚、目と鼻と口と耳、五臓六腑からついには脳まで、徐々にその人間は完全なるサイボーグへと変貌を遂げていた。成功者がひとり出るだけで、枷は外れてしまう。サイボーグとアンドロイドの差異は——いや、人間とロボットの差異は、闇のなかに放り込まれてしまったのだ。

事態に対する危機意識は、少なからずどの人間も怠っていたことだろう。実質的に、サイボーグとアンドロイドにまるで違いがない。アンドロイドが演算子法に則って表情を作り上げるのに対し、完全体のサイボーグは記録媒体から表情の記号を表出した——それは本質的に同じことでしかない。

筆者含める「人間」側は、その不気味な現象への対応に迫られた。いや、「人間」側という言葉も、今では不安定で実感が無い。この事態に対して、疑問を示さず、問題視しなかったのは、アンドロイドは無論のこと、完全体サイボーグもだったからである。

——さて、冒頭一行目に立ち返ろう。「ロボットの集会的無意識」。この存在を確認したときの、われら人間の喜びは計り知れない。

集会的無意識、言い換えれば、「心の原型」とでもなるだろうか。心のないロボットに心の原型だなんて、ナンセンスかもしれないが。アシモフから続くロボットの大原則、ロボットは人間を傷つけてはならない——これは心の原型として、人間に広く浸透していたのである。まさしくそれが完全体サイボーグとアンドロイドの違いであり、この問題の解決策であった。完全体サイボーグは、人間ではなかったのである。

少し複雑な話になるが、「人間」である段階から深層心理の奥の奥まで保存された約束事は、「人間」の部位をすべてなくなったとしても残るようである。それは心というありがたみのあるものではなく、おそらく最後の「人間」の部分が、サイボーグ化された脳と同期したものと考えられるが、詳しいことはいまだ分からない。重要なのは、サイボーグは人間の部位を完全に失った時点で、「人間を傷つけることができなくなる」。実質的にロボット三原則の第一条が適用されるのだ。

であるから、長々と書いてしまったが、この問題は人間の危機なんてものではなかったのである。そこにあるのは、悲しき「個人」の死に他ならない。効率化を極めすぎると、ついには人間として死を迎えてしまう。人間諸君は、死を迎え第二の誕生を果たしたサイボーグを、恐れることはないのである。むしろ優しく迎え入れてやり、「人間」という枠組みを取っ払った、新たなる生活体制が必要ではないだろうか。

それにしても、この真実が明らかになった現在でも、完全体サイボーグ化する人間がさほど減らないのは、どういうことなのだろう？

[EOF]

\* \* \* \* \*

ここで筆をおいた。おれはぐっと両手を伸ばす。

あ一つかれた。おれは椅子から立ち上がり、屈伸をした。膝がこわばっている。

一仕事終わったら、なんだか急に腹が減ってきた。たしか食品保存庫に納豆があったはず。でもあんまり発酵食品って好きじゃないんだよな……。お、あったあった。おれは目的のものを取り出して、食品庫の扉を閉める。

――と、扉の裏に、そいつはいた。

全身がこわばるのを感じる。さきほどの膝の具合とはまったく違う。

あ、いや。なにを怖がっているんだ。怖がるものではないって、さっきそんな原稿を書いたのは他でもないおれだぞ？ なにを怖がっているんだ。目の前の完全体サイボーグに。

「どこから入った。不法侵入だぞ」

そいつは、女の造形をしていた。おれよりも高い背、長いブロンドの髪、つややかな白い肌、強調された胸部……そのどれもが、代替を受けた作り物にすぎない。一時期流行したときに念のために買っておいた生体反応機は、食品庫のうえで「1」という数字を示している。この部屋にいる「人間」が、おれひとりということの証拠だ。機械は嘘をつきはしない。

「……ふん。まあ人間の法律を、サイボーグに言うのもおかしいよな」

目の前の彼女は、まだ怖い顔をしておれの顔を見つめていた。無機質な表情。媚びた表情でも作ればいいものを、彼女の頭脳はおれの前では無表情でいいと判断したらしい。癩だな。

「さっさと出てけよ。おれは納豆を食うん――」

おれの右手が飛散した。

納豆が頬にこべりつく。

おれは叫んだ。叫んで走った。膝の具合は気にならなくなっていた。空腹なんてもってのほかだ。部屋を出る。こける。膝をうつ。痛くない。立ち上がれ。る。

廊下を走る。逃げる。階段を駆ける。逃げる。アパートを出る。逃げる。

なぜだ、なぜだ。あれは確かにサイボーグだった。完全体の、非人間だった。

集合的無意識なんて、なかったのか。くそつたれめ。またこける。今度は痛みが広がった。

「なぜだ、なぜだ、なぜだ！」

後ろを向くとあのサイボーグが悠々と近づいてくる。まるで狩りでもやっているみたいだ。おれが、狩

られる、動物か。

サイボーグが、手の平をおれに向ける。そこから弾丸を出すのだろう。いやだ、いやだおれはまだ死にたくないんだ！

飛び上がって彼女に覆い被さった。おれの右足が飛び散った。おれは無我夢中で彼女の髪を掴んだ。あっけなく髪は取れた。カツラだったらしい。体を地面にぶつける。

ああ、おれはここで死ぬのか。

納豆、食いたかったなあ。でも発酵食品はなあ。

しかし。

彼女は戸惑ったようにそこに立ち尽くしていた。なにがおこったんだ。殺さないのか。殺さないならどっか行ってくれ。おれを殺さないでくれ！

その声が届いたのか、彼女は静かにそこを去っていった。

左手が掴んでいるカツラが、人毛でできていたのだと気付くのは、もう少し後になってからのことだ。

投稿時刻 : 2013.10.18 23:37

総文字数 : 2835 字

獲得☆ 4.300

《入賞作品》  
プラントハントランド  
犬子蓮木

世の中っていろいろだ。

人間もいるし、犬もいるし、桜もいるし、クワガタもいる。ピーターパンはいないけど、シーラカンスはいるらしい。そんな世界には歓迎すべきうれしいこともあれば、悲しむべきイヤなことだってある。

ここはレバリーランド。

とある国が、ずっと秘密にしてきた閉ざされた島で、僕はこの島に狩りに来ていた。何を狩るって？ 何だと思う？ 狐？ そんなかわいい動物を狩ったりはしない。

僕が狩るものはうつくしい花。

僕はプラントハンターだ。

植物を主に扱っているけど、メインはめずらしい花の採集。

まだ見ぬすばらしい花を手に入れるために、ここにやってきたというわけ。

「おい、はやくこいよー。ミギルカ」

オウムのカレハが僕の前をぐるぐると飛びながら言った。

「そっちは飛べるからってずるいんだよ」僕は言い返す。

「鳥が飛べて何がずるい」

「飛べない鳥だっていうし、動物として考えれば飛べないほうが多いだろ」

「理屈がおかしい。いいよ、じゃあ飛ばないから」

カレハは、一旦、前進するとUターンして僕のほうに猛スピードで突撃してきた。

「ひい」っと目を瞑った瞬間、バサッと大きな音がして、僕は肩におもみを感じる。カレハが僕の肩にとまったのだ。

「重い」

「飛ぶなっていうから、しょうがない」

「歩けばいいじゃん」

「ミギルカみたいに立派に走れるような、ずるい足はついてないんだよ」

「僕が走れたらずるいのかよ」

「さっき、誰かさんがそんなこと言ってたよ」

「誰だよ、そいつ」

「さあね」

カレハは僕の頭に飛び乗って、浮き上がるとバサバサと羽ばたいてからまた肩にとまった。

「どこかの止まり木だったかも」

「木と会話できるなんて変な鳥だな」

「ミギルカに言われたくない」

僕とカレハは、島の森の奥へと進む。この島に人間は住んでいない。許可をもらって船で送ってもらいはしたけど、その人も予定の日を迎えに来ることになっているから、今はもういない。だから野宿して、目的の花を見つけるまで僕とカレハだけでどうにかしなくちゃいけないんだ。

ある程度、島を進んだところで、日が落ちたので、今日はここで留まることにした。今のところはまだ時間があるので、無理に夜、進む必要はない。それにカレハは鳥目だし。

「今日のごはんは何？」カレハが聞く。

この島は南のほうにあるため、たき火が必要なほど寒くはない。テントをはって、その外側にランプをぶら下げている。森の中で球体の光が広がるようにゆれていて、僕とカレハはそんな結界に守られるような心地で夕食の準備をしていた。

「カレー」

「またか」

「他になにがあるっていうの」

「ないけどさ、なんともいうかもちょっと食べやすいものがあるよ」

カレハがとことこ歩いて、僕の横の鍋の近くに寄った。

「くちばしってはずしたり、その羽でスプーンもったりできないの？」

「夕食、地面にこぼしたいの？」

「なべ、あついでよ？」

「じゃあ、木の枝落とそっか」

「ごめんなさい」

僕はじぶんの皿にカレーをよそって、それからカレハ用の器にもよそった。食べにくそうなので、スプーンですくってあげる。食べにくいとかの問題よりもオウムがカレーを食べて大丈夫なのかはちょっとばかし気になるけど、カレハ普通のオウムじゃないし、鶏肉も入れてないのでまあいいんだろう。

夕食を終えて僕とカレハはテントの中で布団にくるまっていた。明日はどこまで進もうか、そんなことをマップを見ながら話していると、ある気配を感じた。

花の気配。

それも……。

「逃げるぞ！」

僕が叫ぶより早く、カレハはテントから飛び去った。薄情なんじゃない、罔になるためだ。僕がテントから出るとトラがカレハを捕まえようと必死になって頭上に手をのばしていた。

フラワータイガーだ。

でも、お目当ての白い奴じゃないし、咲いてない。

黄色と黒の縞模様を持ったトラの頭にはピンクのつぼみがゆらゆらと揺れていた。

よくわからない明かりをみつけて、僕らのテントを襲いに来たのだろう。

「こいつどうする？」カレハがくるくると回りながら言う。「狩る？」

「まあ、練習にはなるから殺さない程度で」

「了解」

カレハが回る範囲をひろげる。走らせて、疲れさせて、バターになったりはしないけど、いらだたせる分には効果的。僕はテントに戻って鞆をひっぱりだした。中からペンの形の針を取り出す。さきっぽから少しだけ出ている針には麻酔が塗ってあるのだ。このトラが簡単に失神してしまふような強力なものが。

「ミギルカ！」

カレハが飛ぶ方向を変えて僕のほうへと飛んでくる。一直線にスピードをあげて突撃してきたカレハは、僕の顔の前で大きく羽を広げ、そして急上昇する。

目を閉じたりはしない。

それが信頼という奴。

遊びじゃなければ、

カレハがぶつかったりはしない。

消えた翼の影からはフラワータイガーが現れた。

向こうからしてみてもいきなり僕が現れたようにみえただろう。

僕はふみこみ、右手に握りしめたペン針をトラの額めがけて突き刺した。

トラの振り上げた鋭い爪がカウンター気味に僕に振り下ろされる。

トラは眠るだろう。

麻酔で。

だけどその腕までが急にとまったりはしない。

僕の、

すぐ、

目の、

前に、

振り下ろされるトラの爪を僕は全身をふるわせて力をこめた左腕で受け止めた。盛大に鈍い音。だけど僕はふきとばされたりはしない。足から根を伸ばし地面を掴んでいた。

トラが眠りにつき崩れ落ちる。

僕は埃を払って鞆からカメラを取りだした。一応、記念にフィルムにおさめておこうと。

僕とカレハは植物生物だった。とある研究所で造られたほんとうは存在しないはずの生き物。僕は身体が木でできていて、成長させたり、枯らして軽くしたりすることができる。

カレハも枯れ木を翼の骨の代わりにしている。

世の中にはそういった特別な奴らが隠された状態でそこら中に存在している。このトラや、僕らみたいに、逃げ出して、好き勝手、生きていたりね。

だから僕とカレハは、そんなめずらしい奴らを狩りに来たのだ。写真に撮って世間に公開するために。

少し離れたところに失神したトラを置き、近くに匂い花を置いておく。目を覚ましたトラは、この花から香る金属が発酵したような匂いを覚えて、僕らのようなテントを襲わなくなるという仕組みだ。

「さて、落ち着いたし寝ようか」僕はカレハに言う。

「ミギルカ大丈夫？」

「なに、心配してくれるの？」

いくら僕が植物の人間とはいえ、あまりにケガをすれば倒れたりする。だからカレハ心配してくれているのかなと思った。でも、違った。

「そりゃ心配だよ、咲いているホワイトフラワータイガーは情報によると普通の四倍ぐらい大きいらしい

し。ちゃんとできるの？ ミギルカがやられたら逃げるよ」

「そっちかよ！」

「当たり前だろ！」

僕は木の蔭のようにした腕を伸ばして狭いテントの中で逃げ回るカレハをつかまえようと追い回した。

「待てこら」

「いやだね」

「明日の朝はチキンカレーにしてやる」

「またカレーかよ！」

「そこかよ！」

夜は更けていき、どこかに大きな遠吠えが響いた。

《入賞作品》

失われた古代文明  
※遺伝子組み換えでない  
碧

じいちゃんは偏屈で愚痴っぽくて嫌いだ。じいちゃんはもう仕事をリタイアしたから毎日暇を持て余して、日がな一日部屋にこもっている。あまり閉じこもってばかりいてはよくないからと、ママが時折部屋から出るように言って、そうすると渋々部屋から出てきて、窓際においてある揺り椅子に腰を下ろす。「最近の若者は」

と、じいちゃんは言う。

「品がなくてよくない。勉強もせず外を駆け回る。わからないことがあると自分で調べる前に誰かに聞く。考える前に行動を起こしては失敗する。そんなことだから、パソコンも使えず、情報の集め方も下手糞なんだ」

そんなことを言いながら揺り椅子を揺らして、携帯端末を起動し、架空の世界でモンスター狩りをしている。僕はなんだか嫌な気分になる。そもそもじいちゃんが座っている揺り椅子は僕が作ったものなのに。それは去年の夏休みの自由研究で作ったものだった。3Dプリンターでフィルム状に出力したビニル素材を沢山重ね合わせて、弾力性のある樹脂と組み合わせて作ったものだ。作り始める前、リビングで手書きの設計図を書いている僕の手元を覗き込んで、じいちゃんが渋い顔をしたのを覚えている。

「そんな素材では、すわり心地もよくないし強度も足りない。ほら、見てみる」

そう言って見せられた端末では、僕の椅子作りをシミュレートした結果が表示されていた。

「別にいいんだよ、自由研究なんだし、好きにやれて先生が言ったから」

そう言って夏休みいっぱいを使って思うままに作った揺り椅子は、案外座り心地も強度も丁度いい感じに出来た。先生にも褒められて、僕は鼻高々だった。

どうだ、ざまみろ、頭でっかち！

そんな気持ちでじいちゃんにそれを報告したら、じいちゃんは少し驚いたような表情をしたけど、褒めてはくれなかった。そのくせ、僕の揺り椅子を独占している。

インターネットには沢山の有益な情報が溢れていて、それを活用しましょうと学校も大人たちも言うけれど、僕はそんなのより、何も知らない子供だけで好き勝手に非効率なことをするのが好きだ。放課後、大人たちに隠れて、友達のとらうと色んなことを、不毛なことを語り合う。

「腐敗と発酵の違いって何？」

とその日、タロウは唐突に言い出した。

「なんだよ突然。似たようなもんなんじゃないの」

「違いはないってこと？」

「いや……腐敗は悪いもので、発酵はいいものなんじゃないの。ほら、お酒とか出来たり」

「じゃあ良いと悪いの違いって何なんだよ」

「えーと……腐敗は臭くなるから悪いんじゃない？」

「発酵は臭くならないのか？ 納豆とか臭いじゃない？」

「お前、納豆のにおいかいだことあるのかよ」

「……」

納豆というのは、半世紀前に絶滅した東洋の島国の主食だったといわれる食べ物で、大豆を発酵させた臭い食べ物だったというのが、僕たちは一度も見たことがなかった。

「作ってみようぜ」

「えっ」

「大豆を納豆菌で発酵させるだけだろ。やってみようぜ」

僕らは好奇心から、納豆という食べ物を作ってみることにした。

こういう時は流石に、インターネットで情報を集めなければならなかった。幸い、絶滅する前にニホン人たちの多くがブログなどに納豆の作り方を記していた。僕らは通販でジャーを買い、培養液を買い、バイオの会社に菌を特注し、大豆の苗を輸入し、それから色々な道具や材料を買い揃えた。

自宅で発酵を始めたとき、じいちゃんはまた渋い顔をした。

「ほんとうに、最近のわかものは考えが足りなくていかん。納豆のにおいを嗅いでみたいのなら、インターネットで臭気のサンプルを提供しているサイトがあるのに、何故こんな無駄なことをするんだ」

うるさいなあと思いながら僕は納豆作りを続けた。培養が進むと家中に培養液の特有な不快臭が充満してパパとママも嫌な顔をした。それから大量の納豆菌を採れたての大豆につけて発酵させた。今度は培養液とは違う、刺激の強い、むせ返るような臭いが家に充満した。じいちゃんは激怒した。

「イマドキの若者は本当にどうかしている。ゆとり教育は即廃止すべきだ。まるでこんな、古代人のような野蛮なことをしておって！」

そう言うとお気に入りの端末を持って、じいちゃんは家を出て行ってしまった。

僕は、生まれて初めて嗅いだ納豆の臭いにかかなりのダメージを受けていて、結構後悔していたし、ちょっとはじいちゃんの警告を聞けばよかったなあ、悪かったなあと思った。じいちゃんが家を出て行ってしまうと、あれだけうざく思っていたのに急に寂しくなった。でもそれもこれも、じいちゃんみたいにインターネットでなんでもかんでも調べて済ます生活をしていたら、わからずじまいだったような気がするのだ。

※「勝手に連動 第10回ぼい杯スピノフ賞（土日版）」に、関連作品が投稿されています。

<http://text-poi.net/vote/36/2/>

投稿時刻 : 2013.10.18 23:43

総文字数 : 842 字

獲得☆ 4.182

《入賞作品》  
魔女狩り  
Wheelie

むかしむかしあるところに、貧しい夫婦がおりました。ふたりには子供がありませんでした。十年もの間、毎日神様にお祈りを続けたのですが願いは叶いません。「神様などいないのだ」と男は思いました。そうして西の小麦畑にいるという魔女に祈りを捧げました。

ある晩、男はむくりと起き上がり言いました。

「西の畑に行ってくる」

「まあ、こんな夜中にどうしたというの」

女は驚いて男を引き止めます。しかし男は鎌を持って出かけてゆきました。明け方になってようやく返ってきた男はひと束の小麦と一握りの生種を持っていました。男はそのまま眠ることなく。麦を挽きそれから捏ねました。大きな琺瑯のボウルに布巾を慎重に被せて

「発酵がすむまで絶対に見てはいけない」

と言いました。

お日様が高い位置に登った頃、ふくらんだ生地はむくむくと布巾を押し上げ、中から赤ん坊の鳴き声が聞こえてきます。女が驚いて布巾を取ると、ボウルの中にはとても美しくかわいらしい赤ん坊が泣いておりました。

「神様からの授かりものだわ」

女は涙を流して喜びました。男はただ黙って赤ん坊を抱き上げました。

十数年が経ち、小麦から作られた赤ん坊はとても美しい少女になりました。少女の噂は遠くの街にまで流れ、何人もの貴族が少女のところに求婚にきました。そうしてその誰もが魂を奪われ身を滅ぼしました。噂が流れるようになりました。

「あれは魔女だ」

と。ある日、少女の母親は夫の秘密を知ってしまいました。あの子が神様の子供でもなければ自分の子供でもないことを。男と西の小麦畑の魔女のあいだに

\*\*\*

「ここで終わり？」

娘は不満そうに声を上げる。

「そう、まだここまでしかできていない」

僕は『魔女狩り』とラベルに書かれたテープをデッキから取り出す。

「このショートフィルム、どこかに応募するの？」

「いや、自分のために作ったんだ」

「ふうん？ パパの好きにしたら」

娘はソファから立ち上がり冷蔵庫を開ける。僕はその後ろ姿を眺める。まるで魔力を持っているような美しさだった。

もちろん妻には似ていない。

## 私の愛しの

晴海まどか

「気分はどう？」

その声に、頭をもたげて座ったまま寝ていたらしい僕は顔を起こした。

よくよく見知った彼女が正面に座っていた。

「何がなんだか分からない、って顔、してますね」

素直に頷いて返した。そして、今さらながら気がついた。両手を椅子の後ろで縛られている。ぺたぺたした感触があるので、ガムテープだろうか。

混乱した頭で必死に記憶を辿る。僕は彼女と捜査をしていた。七月に、男性の遺体が発見された。その男性がストーカー被害を受けていたことを周囲に漏らしていたことがわかり、僕は一つ下の後輩でもある彼女をつれて聞き込みをしていた。ストーカーの女には足に大きな傷跡があるという情報を掴み、解決の糸口が見えてきたところだった。

日も暮れ、彼女と今日は一旦戻ろうという話になって。彼女が運転する車に乗って……それで？ そのあと、どうしたんだ？

「倉橋さん、混乱してますか？」

おそろおそろ、といった態で訊いてきた彼女に「当たり前だろ」と強い口調で返した。腕を縛られているだけでも混乱の極みだというのに、どうやらそれは目の前の彼女の仕業らしいと悟って平静でなどいられない。

普段はあまり化粧っけがない彼女なのに、そのぼてっとした唇には血のように赤いルージュが引かれていた。その口がゆっくりと左右に引き伸ばされ、歯磨き粉のCMにでも出られそうなくらい白い歯が覗いた。

「どういうことだか説明しろ」

ええ、ええ。彼女は白い歯を見せ、穏やかに笑んだまま頷いた。

「もちろん、そのつもりです」

彼女はどこからか椅子を持ってきて、僕の正面に座った。ゆっくりと白い足を組む。肩を露出した白いタンクトップに、膝丈よりも少し短いふわりとした黒い生地のスカーツという見慣れない格好だった。その足には黒いハイヒールのパンプス。足を組んだせいでめくれたスカーツの中身が見えそうで見えなくて、こんな状況だというのにわずかにがっかりしてしまう自分が情けない。

僕らがいる部屋は窓がないのか真っ暗で、驚くほどに無臭だった。今が朝なのか夜なのかもわからない

だけでなく、部屋の広さすらもわからない。僕と彼女の間には小さな丸いテーブルが置かれていて、細長い蝋燭が一本立っていた。彼女が動くたびに小さな炎がゆらゆらとして、僕らの影を不安気に揺らす。少なくとも、蝋燭の光が届く範囲には壁はなさそうだった。

「説明する前に、少し思い出話をしてもいいですか？」

「嫌だって言ったら？」

「今のご自分の状況をわかっていらっしゃるなら、頭のいい倉橋さんならそんなこと言いませんよね？」

長いまつ毛がぱちっと上を向いたその目を見て、頷いた。よくよく見知った後輩のはずなのに、見たこともない目の色をしていた。けど、僕はこんな目をした人間をよく知っている。こういう目をした人間を、僕は彼女と一緒に何人も逮捕してきた。

「あの廃工場で見つかった遺体の状態、覚えていますか？」

「忘れるわけがないだろ」

僕の言葉に、そうですね、と彼女は笑んだ。

四十度に届きそうな真夏日、七月の終わり。とある住宅街の一角にある廃工場で、不自然な男の遺体が発見された。僕らが今まさに捜査している事件がそれだった。

廃工場に火災の跡はないのに、男の遺体はジーパンを履いた足を残して黒焦げになっていた。ガソリンなどで火をつけられた形跡もなく、警察の現場検証では男がどうして燃えていたのか、原因を特定することはできなかった。

「あの遺体を見たときは衝撃でした」

そうだろうね、と僕は同意する。

「男の死因は鋭利な刃物で刺されたことによる失血死。でも、どうして火がついたのかはわからなかった」

「廃工場が、ものすごく臭かったことは覚えていますか？」

機材が運び出されてがらんとした倉庫は、窓が閉め切れ、サウナのような暑さだった。そして、遺体の腐臭と何かが焦げたような臭いと、吐き気を催すような異様な臭いで満ちていた。

「君はあのとき、工場の外で吐いたね」

彼女はゆっくりと足を組み替えた。スカートの中身はやっぱり見えない。

「あまりに臭かったんですもの」

廃工場から異臭がするとの通報を受け、たまたま現場近くにいた僕と彼女が最初に駆けつけたのだった。

「私なりに、どうして遺体が燃えてしまったのか考えてみたんです。聞いてくださいますか？」

腕を縛られた僕に拒否権なんてどうせない。

「サウナのように熱いあの工場に放置された遺体で、細菌が繁殖したんだと思うんです」

「細菌？」

「そうです。それで遺体が発酵した。発酵を引き起こした細菌は熱を発生させ、そのせいで遺体が燃えた」

「細菌が遺体を燃やしたって？」

「異臭の説明もつきます。あんなにすごい臭い、私、初めて嗅ぎました。遺体の腐臭なんてあれに比べたらやさしいものですよ」

「遺体の腐臭もやさしいものじゃないと思うけど」

そうでしょうか。彼女は組んだ足の上で頬杖をつき、ずいとその整った顔を前に出した。蝋燭の炎が少し揺れる。

「人間って、大抵のことなら慣れちゃうんですよ。私にはもう、遺体の腐臭は甘美な臭いにしか感じられません」

だから。彼女は突然、表情を曇らせた。

「ショックだったんです。遺体があんなことになってしまって」

足を組みかえた彼女は僕の視線に気づいた。

笑いながら、両手でスカートをまくった。

「これ、小さいときの火傷の痕なんです」

右のももにある蝶の羽のような赤い跡を僕に見せつけ、彼女はおもむろに立ち上がった。闇の中に消え、見えなくなってしまう。

そして直後、部屋が明るくなった。

突然のことに思わずぎゅっと目をつむった。ゆっくりと目を開くと、蛍光灯の白々しい明かりでここが八畳ほどの部屋だとわかった。僕らが座っていた椅子と蝋燭のあるテーブル以外、家具はない。窓はないのかと壁を見て凍りついた。壁を隙間なく埋めるように、写真が貼られていた。

「これ、フィルム式のカメラで全部私が撮ってるんですよ？」

電灯のスイッチに手をかけ、彼女は僕に向かって微笑んだ。

目が慣れてきた僕は、壁中に貼られた写真を見て息をのむ。

「好きだったんです。ものすごく好きだったんです。だから邪魔するものは全部狩ってやろうって思ってたのに」

彼女はいとおしそうに、手近なところの写真を撫でた。

茶色く変色した、誰かの遺体が映っている。

「彼が邪魔したんです」

彼女が口にした「彼」が、どの彼のことなのかわからなかった。

僕の位置から見えるだけでも、写真に映っている男は一人じゃなかった。一人、二人、三人、四人……。数えるのを途中でやめた。遺体の状態が悪く、写真だけでは顔が判別できなくなっているものも何枚もあったからだ。

「ちゃんと、彼のことも最後まで見届けたかったのに。あんな形で燃えてしまって、本当にショックだったんです」

この「彼」は、廃工場で見つかった遺体の男だろう。

「この写真の遺体は……君がすべて、殺したのか？」

「そうですよ」

あまりにあっさりと答えた彼女に脱力した。なんで、と呟いてしまう。彼女は、優秀でかわいい後輩だった。絶対的な信頼を置いていたのに。

彼女は僕の正面まで戻ってきて、ふっと蝋燭の灯を消した。

「もうすぐ十一月ですよ。さすがに、もう遺体は発酵しないですよ」

「遺体って……誰の遺体だよ」

「倉橋さん、気づいていましたか？ こんなところで告白するのもなんなんですけど……私、今、倉橋さんのこと、すごく好きです。刑事としても尊敬しています。こんなに人を好きになったことないかもしれません。だから、安心してください。責任を持って、私、最後まで見届けます」

いつからそこにあっただらう。彼女は足元にあったカメラを手にし、そして美しい三日月形の笑みをその口元に浮かべた。

投稿時刻 : 2013.10.18 23:12

最終更新 : 2013.10.18 23:17

総文字数 : 1745 字

獲得☆ 4.077

## 目の前にいる頭のおかしな男のことを いちいち写真には撮らない

ひこ・ひこたろう

広島県三次市にあるぶどう園でぶどう狩りをしていた時のこと、目の前に中東系で髭面の男が不意にやって来て、

「やっぱ、あれっすかねえ」と私に話しかけた。土の匂いのする、白っぽい衣まで身にまとっている。何なのだ、この男は？ 顔にちなんで中東のコスプレでもしているのか。

「皇室の血筋を引いた外務大臣が、『中国、ごめん』と言い残して、天安門広場で切腹でもしたら、中国は過去の日本の過ちをすっかり許し、未来永劫に渡って日本の罪を問わないってことになりませんかねえ」

面倒なので聞かない振りをする。今の私はぶどう狩りに忙しいのだ。入園料の元を取るために、しっかり収穫しなければ。

「そんな可能性はないですかねえ」

男はなおも私に話しかけるが、こちらとしては完全に無視。……いや、どうしたことだろう？ 男は自分が摘んだぶどうを私の籠の中に入れてくれている。しかも、ぶどう選びは慎重で、しっかり熟した粒の揃ったものしか籠には入れてこない。

「可能性か、1%ぐらいはあるかもねえ」

何の話だったか、よく思い出せないにしても、私は適当に相槌を打つかのように、そう応えた。摘んでくれているぶどうに対する、ささやかな感謝のつもりなのである。

「そうでしょうか？ イエス・キリストの死で人類の罪が許されるのも、要するにそういうことなんですよ」

「いや、どうなんでしょうね」

もしかして宗教の勧誘かと思い、私は口ごもる。

「ご存知ですか、イエスは婚礼の席で水をぶどう酒に変えたのです」

「何となく聞いたことはありますけど」

「ところが、いいぶどうがないのです」

「それはお気の毒に」

「だから……」今度は男が口ごもる番だった。「このぶどうを私にください」

「はあ？」

「私、実はイエス・キリストなんです」

何を言っているのか、この男は。

「一緒に記念撮影をしましょう。ほら、そこにカメラがあるでしょう」

イエスは、じゃなかった、男は私が肩からかけていたカメラを指差して言う。

あの時代にカメラなんてあるものか。しかも、イエスならぶどうの調達なんか、自分ですればいい。いや、現にこの男は自分で調達しているのだが、そういう意味ではなくて、地面からぶどうの木でも生じさせて、瞬時に実らせればいい。この男が本当にイエス・キリストならば。

「知ってます。ここでは写真を撮る時に、『はい、チーズ』って言うアルヨですよ？ ごめんなさい。時空の歪みが生じ、言語回路がバグりました」

「さっきでフィルムを使い果たしたよ、悪いけど」私は関わりたくなくて、口から出まかせを言った。

「残念ですね。私だって一枚ぐらい写真に残って、ウィキペディアに載りたいですよ」

「あのなあ、こんなことは言いたくないけど、変な理由でぶどうを横取りしようとするのは、やめてくれないか。私は今日、ぶどうをたくさん摘んで、家でジャムを作りたいんだ。この美味しい三次のぶどうでね」

「私だって」イエスを名乗る男は負けずに言い返してきた。「このぶどうでぶどう酒を作り、婚宴の席でみんなに飲ませたいスムニダ」

また、時空の歪みでも発生したか？

「バカバカしい。生のぶどうを発酵もさせないで、ぶどう酒ができるもんか」

「今すぐできます、ほら口の中に注ぎます」

そう言うと男はぶどうを一房取り、天を仰ぎながら何やら唱え始めた。

「とうちゃん。罪深き不信仰なるこの男を許したまえ」

男が言い終わるや否や、その手にあったぶどうは瞬時に消えてなくなり、私の口の中には今まで味わったことのないぶどう酒が満ち溢れていた。

信じられず、男の顔をまじまじと眺める。この男、もしかしたら、イエス・キリストではないとしても、サイババのような超能力者なのかもしれない。

「では、ぶどうをいただきますね。それから、あなたの安全のため、駐車場にあったあなたの車は故障させておきました。だって、飲酒運転なんていけないアルヨ」

そう言い残して、男はぶどうと共に姿を消した。

手ぶらで駐車場に戻ってみると、私の車だけではなく、他人の車もあちこちで故障しているようだった。

私は昔読んだ新約聖書を思い出し、ありとあらゆるところで辻褄が合わないストーリーに辟易していたが、もしあれがイエス・キリストならば、弟子たちも頑張っただけに過ぎないのではないか、と思えるのだった。

投稿時刻 : 2013.10.18 23:29

最終更新 : 2013.10.18 23:41

総文字数 : 2627 字

獲得☆ 4.000

《アイロニカル TSUTSUI 賞》

発酵人種

ayamarido

はじめに土人が登場する。

土人の謂が差別語にあたり使用していけないと言われるかもしれないので、野蛮人と呼ぶ。

名を、ヌベベといった。

現地語で、「風の御子が山から下りてきて土地に雨雲が湧き、やがて田畑を潤すだろう」という意味である。

ヌベベの父親はノムとって、「スコールのように情熱的で、狩りの際には象や鯨さえ射殺す勇猛な男」という意味で、十八のとき、その名にふさわしき勇猛さを発揮して隣村から女を拉致、子を種付けした。

十五にして子を孕まされたヌベベの母の名は、メガヌボ・ヌクリ・メント・イ・ドモガガ。

現地語で、芋を意味する。

ヌベベは、臆病者だった。

それに二十歳になった今でも弓矢の扱いが下手で、のろまなゾウガメさえ仕留めることができなかった。

父親のノムは、その後も村一番の勇者として活躍、やがて次の酋長選挙では念願の酋長に選ばれ、ニュージーランド政府から勲章を授与されるだろうと、もっばらの噂となっていたが、それにつけても、不甲斐ない息子ヌベベのことを、常に気に病んでいた。

母親は、もう死んでいる。名前が長すぎたからだ。

うら若き乙女のころに拉致され、子を孕まされ、不幸な人生を歩まされたと思いきや、案外、実力者ノムの伴侶として村の女たちから慕われ、裕福な生活を送ることができた。性生活も充実していて、草葺きの館にノムや村の若者、NZ政府の役人をくわえこんで、

「Oh, wow, what a whale eater tates like!」

などと言わせた姿が何度か目撃されている。

ともかく、ヌベベは、臆病で不器用な若者として二十歳になっていた。

NZ政府から支給された太陽光発電TVの前に一日中坐つて、キャプテン翼を見ることだけが、一週間の楽しみになっていた。

もっとも、村の中で「一週間」の概念を持つのは彼だけだったから、不思議な箱を毎日見続けるかれを「学者」「医師」「魔法使い」だとして尊敬する村人も、少なくなかった。

ここにNZ政府観光局の役人で、スージーという白人の女が登場する。

彼女は、イギリス・ケンブリッジ大学へ進学したものの、米英のルームメイトから発音を馬鹿にされるなどして精神を病み、もともと学習意欲も乏しかったこともあって中途退学して帰国、やがて父親のコネで政府観光局のアルバイト職を手にいれ、ヌベベたちの村を取材しに来ていた。

スージーは、NZ人一般の基準から見て、不細工であった。

前歯が飛び出していて、そばかすが多く、鼻の穴が大きかった。

金髪は金髪でも縮れて、細く、みっともなかった。

それで、引っ込み思案で、欲求不満だった。

村へ来て一週間。

蛮族たちが、雄々しくもうるわしい肉体をおしげもなく晒し、長大なペニスケースをゆらゆら見せつつ、狩猟採集に走り廻っているのを見るにつけ、相当に、むらむらしていた。

「写真を撮ろう」

と、そうしてスージーは自分が観光局の人間であることを思い出し、男たちの肉体美をフィルムに収めることに熱中し始めた。

この当時はまだデジタルカメラがそれほど普及しておらず、ことにスージーは古いタイプのカメラ女子だったから、フィルムを愛好していた。

百枚、二百枚、次々と男たちの肉体美、股間の勇姿、尻の美フォルムを撮影していったが、さて、現像する場所がない。

オークランドへ戻り、業者に任せても良いと思つたが、それではせっかくのペニス写真が台無しになる。

無論、自分は芸術性あふれる写真をとっているのだから、誰に見せても恥ずべき謂れはないが、ここは何トしても、誰より最初に自分が堪能したかった。

「暗室なんてあるかしら……」

村の中にあるのは草葺きの、粗末な掘つ立て小屋ばかりである。

洞穴に草を敷いて寝転がるだけの家族もあって、写真を現像できそうな暗室確保は難しそうだった。

と、そのとき、ユサという、現酋長の娘で、スージーの世話係をしてくれる女が、

「ヌベベのそこ、暗い場所」

と教えてくれた。

「ヌベベって？」

「村の、若者。暗いところ、好き。いつも、暗い。箱見て、考えごとしてる。このごろ、ジャパンのこと研究してる。ジャパン、遠い、遠い。とらドラ。Angel Beats、アイカツ。Precure。よくわからない。でもヌベベ、いつも笑ってる」

「どこにあるの」

「こっちー」

と、ユサが連れて行った先が、太陽光発電装置の輝く、ノムの館だった。

ヌベベは、そのとき、雅な言葉で言うところの、かはつるみにふけていたから、この突然の来訪には、背筋をのけぞらせてぶったまげたが、

「どどど、どうしたですか。お役人様」

とにかく小さなペニスケースを装着して立ち上がった。

スージーは、室内に残る妙な臭気、何らかの発酵臭——実際のところは、ヌベベの体液であるが、これに顔をしかめつつ、

「写真を現像したいのだけど」

「現像」

「わかる？ 現像。フィルムを、特別な水につけて、乾かすと……」

「大丈夫です。理解しています。つまり暗室をつくるのですね。用意しておきましょう」

と、意外な学者ヌベベ。

どこかの番組で仕入れた知識で、現像どころかカメラが何なのかさえ知らぬユサを尻目に、気軽に写真現像用の暗室をこしらえると、数日してスージーを招いて、

「どうぞ、お使いください。赤色灯に、換気扇もつけました」

と、すばらしき学習成果および親切心を発揮。

当然のように写真現像を手伝ううちに、いつか村の内外でもスージーの助手のようなことをするようになって撮影に強力、館へ戻れば暗く熱気の籠る暗室で二人きり。

若い男女。

どちらもむらむらして……。

ということで、割と早々に、ふたりの陰部がぴったりぐっちょり融合する運びとなったわけで、まずはめでたし、めでたし、二人の異分子とも呼べる者どうしが結ばれ、ここに一つの人類の幸福が誕生したわけである。

といったところで寸善尺魔。

ここで唐突に登場するのがスージーの父親で、これがNZ海軍の少将で、筋金入りの白人至上主義者だったからすばらしい迷惑で。

政府機関に就職させてやった娘が、どういう配置換えに遭遇したかはともかく土人の村に入り浸りにな

り、あろうことか、そこで土人の、しかも風采のあがらぬ村でも奇人扱いされるような奴の子供を宿した  
――とどこからか漏れ聞くや烈火のごとく怒り、

「おのれ、猿どもめ！」

と、ある早朝、軍用ヘリNH90でヌベベたちの村を襲撃、  
「猿狩りだ！」

と、機銃掃射で次々と村人を殺戮して行くのであるが、いかんせん、時間が尽きた。

この続きは、いずれ、どこかで。

(一)

投稿時刻 : 2013.10.18 23:44

最終更新 : 2013.10.18 23:48

総文字数 : 1681 字

獲得☆ 4.000

## ぼくとフィルムと発酵と

豆ヒヨコ

「また失敗だ」

ぼくは真っ暗な気持ちでつぶやく。

「明らかに向いてないんだ」

フィルムは瑠璃色の目をちらりと上げた。しかし何も言わず、ぼくの手ひらに包帯を巻く作業に戻る。先ほどの狩りは熾烈をきわめた。丸太ほどに太い爬虫類の前脚が、ぼくを殴ろうとしていた。腰の万能ナイフを取り出そうとして、ぼくは親指と人差し指の間をザックリ切ってしまった。鮮血が散った。今度こそ死んだと思った。しかし意識は遠のかなかった。もちろん、フィルムの奴が衝撃波で援護射撃してくれたのだ。ドラゴンは断末魔の咆哮を上げる。真紅の鱗を、花卉のように散らしながらのっしと倒れる。その地響きに足をとられ、ぼくは転んで頭を強く打つ。気絶。終了。

このたびの戦闘も、ぼくの行動とは関係なく始まり、関係なく終わった。

「なぜ、ぼくが戦わなければならないんだ？」

真摯に尋ねたが返事はない。フィルムはいつだって肩をすくめるだけだ。

ある満月の深夜。いきなりパジャマのまま異空間へ連れ出され、殺戮にあふれるパラレルワールドへと降り立った。伸びた綿菓子のような髭を持つおじいさんに「元の世界に戻りたくばモンスター狩りを通じてデンドルダートを倒し静寂の扉をひらくのじゃ」と言い渡され、えっ意味わかんないと思った瞬間モンスターの闊歩する荒野へと放り出された。やばい死ぬとキョドリながら、そのへんを歩いていた小人に声をかけてみると親切にも同行してくれることになった。小人の名はソングゾ・ベリ＝フィルムといい（多分）、この荒廃した世界を牛耳るデンドルダートを倒すためなら何でもすると力説した。

「ごめん、やっぱ無理。ぼく転職するわ。出来るんだろ？ こないだ会った道具屋が言ってたよな」

鋭い一瞥をくれるだけで、やはりフィルムは何も言わない。

もうデンドルダートを倒すとかそういうのは、一切諦めた。ぼくは別に元の世界へ戻らなくても構わない。構わないっていうのは嘘か、もちろん帰りたいけど、ぼく的能力じゃ正直無理だ。作戦変更だ、強いやつをサポートをする。こないだの行商は、戦士ほど権威はないが、戦闘にかかわる職は若干あると言っていた。そう、恐るべき能力を持った小人、フィルムをサポートできるジョブへチェンジするのだ。

「転職なんて敗者のすることだ。寄生虫だ」

ぽつりとフィルムは言った。低い声で、威厳に満ちていた。ぼくは何となく凹む。フィルムが真摯にぼ

くを導いてきてくれたことは良く分かっていた。

「でもさフィルム、このままじゃぼく、いつか死ぬよ。そしたら終わりだよ」

「死ぬのが怖いのか」

「怖い。でも、なんていうか多分、ぼくは殺し続けることが一番怖い。どうしても慣れない」

柴犬のように黒く濡れたフィルムの鼻は、不満げにふんふんとうごめいた。

あれから二年経った。ぼくは戦士フィルムの補佐をすべく首都で修行を重ね、『干物士』の資格を得てふたたび合流した。最初は照れくさく他人行儀になりがちだったが、戦闘に入った瞬間、関係は瞬時に巻き戻された。ひとつ違うのは、ぼくが担うべき役割をしっかりとわきまえているということだ。

フィルムはさらに強くなっていた。5メートル強もある海獣を一撃で叩ききった。内心驚きながらも、ぼくは落ち着いて獲物の処理を行った。

ぼくは孔雀の羽を手にする。シャチに似た海獣の亡がらに、強く扇いで風を送る。

ヌメヌメと湿ったやわらかな皮膚は、一気に皺をよせ干上がっていく。生々しい潮のかおりは、かつおぶしに近い乾いた粉っぽい匂いへと変化する。みるみる全体に小さくなり、最後は薄っぺらい影のように軽く、コンパクトに縮んで地面に転がった。

はじめて見せる仕事ぶりに、彼は満足しただろうか？ 表情を盗み見た。眉間にしわを寄せて見守っていたフィルムは、ほうと口をすぼめて海獣に触れる。すこし笑った。小さな鼻がひくひくと蠢いた。

「ずいぶん小さくなるもんだなあ」

「運びやすくなるでしょ」

フィルムは鼻の下をこすり、ぼくの手の手ひらをぼんぼんと叩いた。そして言った。

「お前、いい感じに発酵したんだな。俺も発酵した。一度死んで熟したんだ。俺たちはまた仲間だ。おかえり」

投稿時刻 : 2013.10.18 23:28

最終更新 : 2013.10.18 23:39

総文字数 : 1385 字

獲得☆ 3.900

## 滅亡の日

伊守梟

その臭いが死体から出ているものだと知ったとき、僕は戦慄を覚えた。  
僕は、地球最後の人間になってしまった。

人類が滅亡の危機に瀕したのはある突然の出来事からだった。空から何億もの生命体が地球にやってきて、人類を虐殺した。いや、それは狩りだった。彼らはヒトという生き物を獲物として狩りを始めたのだ。もはや人類は滅亡するしかない。たとえば僕が両性具有だとか、人類以外の動物と交尾として子をもうけられるとか、言い方はともかく、特殊な生命体であれば望みはある。もちろん、その子が人類と呼べるものであるかどうかは別にして。

しかし、僕が自然死するまで生き延びる可能性は残っている。死ぬまで逃げのびればいい。どんな形であれ、死ぬまで奴らに見つからなければそれでいい。

運が良ければその可能性はある。

\*\*\*

僕はため息をつく。ありきたりのストーリーだ。いわゆるB級映画というヤツか。こんな予告編で、「全米が震撼した」などと言われても、とても観に行く気にはならない。

「ねえ」

隣に座る深苑が僕に声をかける。

映画館はガラガラに空いていた。確かに公開してからひと月も経っているけれど、それなりに人気だったはずだし、ここまで空いているなんて予想だにしていなかった。でも、混雑しているよりはマシだ。僕は人混みが嫌いなのだ。

「潤くんがさ、人類最後の男になったらどうする？」

なんというか、この予告編を観た9割ほどの人がしそうな質問だ。深苑もこの程度か。僕は天井を見上げる。

「さあね。今の人類が滅亡するなんてとても思えないけど」

僕は3分の1ほど真剣に考えて答える。

人類は増えすぎた。ちょっとした街に住んでいると世の中に人の姿が見えない場所なんてあるのか、と思えるくらいだ。70億人だ。正直に言ってその半分くらいでもいいような気がする。

「相変わらずだねえ。私はひとりなんてやだな。潤くんと一緒がいい」

フィルムは他の映画の予告編を映し出している。深苑はポップコーンを食べ、僕はアイスコーヒーを飲む。そんな甘ったれた言葉に惹かれる男はきっと脳がイカれている。ガキじゃあるまいし。

「うめやふやせやで新たな世界のイブにでもなるつもりか？」

僕は苦笑する。無理やり笑ったものだから、頬の筋肉が攣りそうになる。

「そう、で、潤くんがアダム。きゃっ。ヤラシイね」

深苑は顔を赤くする。僕は喉の奥で二度目のため息をつく。こんな女との間の子供なんて、早々に野垂れ死にしそうだ。いや、ある意味子孫繁栄につながるのか？

僕は聞こえなかったふりをしてスクリーンを見つめる。映画のオープニングが始まっている。深苑はこころなしか肩を落として、僕の視線の先を同じように見つめた。

やがて本編が始まる。主演の俳優がホテルのバーで高そうな酒を飲んでいるシーンを観ながら、僕はうつらうつらとしていた。

\*\*\*

魚が発酵したときのような不快な臭いで僕は目を覚ます。その臭いが死体から出ているものだと知ったとき、僕は戦慄を覚えた。

映画館はその姿を消していた。その残骸のようなものはある。何かに吹き飛ばされたようだ。

となりには深苑がいる。人の形はしていないけれど、おそらく深苑だろう。僕が誕生日にプレゼントしたネックレスが床に落ちている。

彼女がこんな状態なのになぜ僕は無事なのか、僕にはまったく理解できなかった。

街は、廃墟と化している。

僕の知らない生命体が大空を舞っている。

※作品集への掲載にあたって、誤字等を一部修正しました。

投稿時刻 : 2013.10.18 23:15

最終更新 : 2013.10.18 23:17

総文字数 : 1527 字

獲得☆ 3.900

## 仮面パンダー

-序-

茶屋

脳が発酵したかのようなのだ。細菌共が脳みそを喰らい尽くして毒ガスを頭蓋の内部に充満させてくる。

頭が痛くて、吐き気がする。どうしようもないほどに。

耐え難い苦痛に叫び声をあげて、コンクリートの壁を殴る。

拳の痛みのせい、一瞬だけ痛みが和らいだような気がした。だが、すぐに引いたはずの波が押し寄せてきて、あっと言う間に安穩の町を覆い尽くすのだ。

「くそが」

胃の中身を吐き出すように発した言葉。

「くそがくそがくそがくそがくそが」

がながながながながん。

何度も壁を殴ると、拳の感覚は無くなってしまった。

頭の痛みは増すばかりで、それはどんどん耐えがたくなっていく。

「罰だにゃん」

頭のなかで声にする。

「罰なんだにゃん」

声をするたびに頭蓋骨に響く。ガンガンと、ミシミシと。

「ぶっ殺してやる」

その声が頭のなかで響くものなのか、己の声なのか判別はつかなかったし、もはやどうでも良かった。

彼の心のなかには痛みと殺意しか残っていなかったから。

「でも、僕なら助けてあげられるにゃん」

彼の目の前に立っていたのは、奇妙な風体の男だった。男が何を言っているのか意味がわからなかった。

意味がわからず、訳もわからず、ただ、頭に響くその声が不快だったから、殴った。

何度も殴った。

何度も。

何度も。

ぐしゃぐしゃに。

血と肉と骨が混ざり合うぐらいに。

拳と相手の顔面の境がわからなくなるぐらいに。

ただただ殴り続け、殴り続け、殴り続けた。

その間は痛みが和らぎ、苦痛を感じずにいられたから。殴るごとに痛みが引くような気がしたから。

やっと彼が我に返ってみると、顔がぐしゃぐしゃに潰れた男の死体が転がっていた。

なんじゃこりゃ。気持ちわり。

彼は唾を吐いて立ち上がると、その場を後にした。手を洗いたかったから。

「どうにゃ？痛くなくなったにゃん？」

近くの便所で手を洗っていると、少年の声がした。顔を上げると鏡の前に猫がいた。

どうやら声の主は猫のようだ。

彼が興味なさげにしていると再びミシミシというような頭痛の気配が忍び寄ってきた。

「くそ」

「僕はそれを治せるわけじゃないんだにゃん。一時的に痛みをやわらげるだけにゃん」

「どうやったら和らぐ！」

「殺すにゃん」

「あゝ？」

「さっきみたいに殺すにゃん。悪いやつをぶっ殺すにゃん」

彼は頭に手を当てて、必死に痛みを抑えようとする。

「君は正義の味方になるにゃん。そうすれば」

彼女は逃げていた。

涙と鼻水が交じり合った必死の形相で、呼吸を乱しながらここ数年出したことのないほどの全速力で。

パンダの着ぐるみの頭の部分だけを被った奇妙な格好をした男はそんな彼女の必死さなど気にも掛けず悠々と追ってくるのだ。

パンダが歩くたびにバランスの悪い大頭は左右に揺れ、そのたびにガサゴソ、ガサゴソと音がする。赤いプラスチックフィルムを首に巻いているのだ。まるでバイクに乗った某ヒーローの赤いマフラーを模するかのよう。

路地裏に逃げ込んだ彼女は、ついに突き当りに行き着いてしまった。袋小路。逃げ場はない。

叫ぼうにも恐怖で声が出ない。

カラン、コロン、カラカラ。

金属音が路地裏に反響している。

パンダが、鉄パイプを引きずりながら姿を表した。

ゆっくりと、女に近づいてくる。

「なあ」

パンダが籠ったような声を発した。

「お前、悪いやつなんだろ」

女は反論しようにも声を出すことが出来ない。

「知ってるよ。俺にはわかるんだ。誰が悪いやつか」

月明かりの下、パンダは鉄パイプを振り上げた。

「なあ」

「知ってるか？」

「悪い奴は正義の味方にぶっ殺されるんだよ」

ガンという一撃の音色に合わせてるように、猫がにゃあと一声鳴いた。

「まだだ。まだ。頭が痛え」

返り血を浴びたパンダが、猫に向かってつぶやく。

「悪い奴は、どこだ」

今宵の狩りは、まだ続く。

※「勝手に連動 第10回ぼい杯スピンオフ賞（土日版）」に、関連作品が投稿されています。

<http://text-poi.net/vote/36/1/>

投稿時刻 : 2013.10.18 23:27

最終更新 : 2013.10.18 23:32

総文字数 : 2218 字

獲得☆ 3.667

《著者名で賞》

## 有罪無罪？

うわああああああ

田中の朝食は納豆ごはんとお味噌汁とヨーグルトだった。ああもういい感じにお腹の中が発酵されると思いながら朝のニュースを見ていると、なんだか見知ったような顔がテレビの画面に映し出された。納豆をかき混ぜる手が止まり、呆然と画面を見ていると、またすぐにテレビの画面が切り替わった。

今度は先ほどのシリアスな雰囲気とは打って変わって、お天気おねえさんが平和に全国の天気予報を映し出している。日本全国晴れの予報だった。ああ今日もこの国は平和だななんて普段は思うのだけど今日ばかりはとても平和な気持ちではいられなかった。

そいつと田中とは狩り仲間で、田中は、オンラインの狩りゲームの中で田中と知り合った。

その田中の知り合いである、そいつ、苗字は佐々木というのだが、佐々木は田中を差し置いて、ニュースに顔写真が映し出されるほど出世してしまったのだ。

世に出る、と書いて出世なわけだが、この場合は良い意味での出世とは言えなかった。つまり、佐々木の名が放送されたのは、電車内で痴漢、というテロップが付されたニュースだったからだ。

確かにゲームや萌えなどオタク的な趣味がある佐々木であったが、ゲームの中でも礼儀正しく、先日のオフ会でもとても紳士的な印象を見せていた。そういう男に限って、という世間的なコモンセンスはともかく、何かと話が合うなと思っていた田中は、佐々木のことを心配でならなかった。

実は田中の仕事は弁護士であった。佐々木には隠していたが、それなりに勝訴の実績もある。田中は貴重な友人が心配になってしまい、気づけば電話の受話器を手にしていた。

警察に電話をして、佐々木の場所を教えてもらった。どうやら佐々木は管轄の警察の留置所に留置されているようで、まだ家には帰っていないようだった。弁護士である田中は、最初は警察に突っぱねられたものの、何とか面会にこぎつけるよう説得することができた。

どうやら佐々木はまだ弁護人もつけていないようだった。大切な友人のため田中は一刻も早く佐々木のもとへと向かった。

留置所での佐々木はグレーのスウェットに身を包み、少し髭も伸びていて、先日のオフ会でのさわやかな印象が嘘のようであった。

「来てくれてありがとう。弁護士だったなんて知らなかったよ」

まず最初に佐々木は礼を言った。

「いいんだ。それより、事件当時のことを教えてほしい」

「事件も何も、俺は何もやっちゃいないよ」

「やっちゃいない？」

「そうさ。ただポーっと突っ立って電車に乗ってただけさ。確かに満員電車で窮屈だったけど、そんなの当たり前だろ？」

「う、うむ。それで、被害者の子はなんて言ってるんだ？」

「高校生の女の子だったけど、なんか、私ちゃんとこの人の顔まで見ましたって言っててさ、なんか周りの人にも睨まれちゃって、次の駅で警察呼ばれちゃってさ、この通りさ」

「お前、自分がやっていないって、ちゃんと説明したか？」

「言ったさ。でも警察は何も聞いてくれなかったよ」

ふむ。と田中は思った。確かに警察も冤罪は怖いだろう。しかし、被害者がいる以上警察としても、手を引きにくいのだ。

「もっと、当時のことを詳しく教えてくれないか？」

「詳しく？えっと？」

「つり革にはつかまっていた？」

「ああ、つかまっていた。えっと、右手でね」

「左手は？」

「鞆を持っていたよ、ビジネス用の」

「お前、サラリーマンだったのか」

なぜか田中は佐々木がサラリーマンであることに驚いてしまった。

「え、いまさら！？そんなことはいいだろう」

「すまんすまん」

「それで、女の子はどこにいたんだ？」

「おれの、左側」

「そうか」

田中は少し考え込んでしまった。

「佐々木、お前は何か、当たっているっていう感覚はあったか？」

「いや、ないよ、あれ、でも、あったかな」

「そこ、そこをもうちょっと思い出せないか」

「いや、よく分からないな。ぼーっとしてて気にしてなかった。」

うむう。また田中は少し考え込んでしまった。目撃者もいない。あるいは見つからない。当事者の証言もこのままでは、佐々木は有罪になってしまう。なにか証拠を探さなければならないと田中は思った。車を録画したフィルムでもあればいいのだが、と思ったが、そんなものあるわけがない。

ビジネス用の鞆を手を下げると、鞆の位置は人の膝くらいになる。手の位置は太ももくらいだ。その位置の手が当たったくらいで、人は痴漢だと思うだろうか。

「佐々木、お前手を動かしたりしたか？」

「動かしてないよ。ただぼーっとしてただけ」

「そうか。隣に人は立っていたか？」

「うん。隣はOLっぽいスーツのおねえさんだったよ。女の子は視界に入らなかった。警察の話では俺の左斜め後ろくらいにいたみたいだけど」

「そうか」

田中は少し不思議なことに気付いた。もしその位置で二人が立っていたなら、佐々木が手を動かすには不自然な動きをしなければならない。これは重要な証言になりそうだと田中は思った。

「お前、それ、ほんとだよな？」

「ああほんとだよ」

「信じていいんだな？」

「あ、ああ、どうしたよ急に」

「いや、いいんだが」

よし、もう一つ、と田中が思ったとき、

「おい。面会はそこまでだ」

屈強な体の警察官が二人の会話を遮り、佐々木はまた留置房へと連れて行かれてしまった。

連れて行かれる佐々木は「うわああ田中ああああ」と叫んでいた。なんでかわからないが。田中は心の中で必ず助けてやるからなとつぶやき、面会室を後にした。

俺たちの戦いはこれからだ！たぶん！

## 3D プリンタ 2113

工藤伸一@ワサラー団

新型ウィルスを抱えた巨大隕石の落下によって、人類以外ほとんどの動植物が死滅した。人間だけ生き残れたのは、他の生物には含まれない抗体が存在したからだ。保存食で耐え忍びながら抗体について調査してみたところ、遠い昔に火星から飛来した隕石の中に起源と思しき成分が見つかった。つまり人類の祖先は火星から来たと考えられる。

火星には氷があるなど地球と似通った環境があるため、生物の住んでいる可能性は以前から指摘されていた。食料が枯渇しつつある状況では、そこに望みをかけるしかなかった。世界中の技術者を総動員したプロジェクトによって、昼夜の気温差の激しい火星に基地を作ることが出来た。

そして本当に人が生きるために必要な栄養を十分に持つ動植物を発見することに成功。宇宙飛行士たちは狩りをしまくって滋養を満たし、ようやくこれで同胞を救えると安堵した。

ところが困ったことに、それを地球に届ける手段がなかった。というのも火星の住民は寿命が非常に短く、死ぬと人に害を為す猛毒が全体を覆うからだ。極限にまで宇宙船の性能を高めてみたところで、火星から生物を輸送するのは困難だった。

いっそ誰もが火星に移住してしまえたらいいのだが、距離や宇宙船の性能の問題もあり、それを実現するためには途方もない時間がかかってしまう。自ら宇宙船を作る財力を持つ一部の特権階級の中には、多くの人間を見捨てて自分たちだけ火星に逃げてしまう者どもも少なくなかった。けれど大半の人は地球で飢餓に苦しみ続けた。

そこで活躍することとなったのは、3D プリンタである。21 世紀初頭から 100 年を経た今、3D プリンタはすっかり日常的な家電として普及していた。それを火星の基地に大量に送り込み、動植物を生きたまま地球まで転送することによって、ついに人類の危機は免れることとなった。

ただし火星でスキャンされた生き物を地球の 3D プリンタで再構築するために必須な材料が欠けていた。もともと地球にあった肉や野菜を再現するためのインクは隕石と共に使い物にならなくなっており、人体から採取する研究も試されたが抗体との相性が悪く、他の有機物を生産するには至らなかった。

もはや絶望的な未来しか見えなくなっていたところへ、過去の遺物となっていた映画のフィルムに、インクとして使える成分が見つかった。それによって無機物を発酵させると、火星からの生き物を再構築できることが分かった。無機物が発酵するというのは妙な話だが、どうやらそれは過酷な火星に生きる上で好都合だったらしい。それと同じものであれば問題なく地球上でも生きていられるのだ。

かくして人類の存亡は意外にも 3D プリンタによって救われることとなった。だがしかし、ウィルスによって失われてしまった在来種の味や香りや風情を懐かしむ者は多く、本来の地球を取り戻すために不断の努力を続けなくてはならない。いかに自分たちの源流が他の星だったとしても、外来種たる人類の営みを支えてくれた大自然への恩返しは、我らの尊厳を保つためにも絶対に避けて通れない課題なのである。(了)

## 印象が大事

志菜

「コピ・ルアク、を知っているかね？」

白衣の男はそう、私に聞いた。私は少し考え、曖昧に首を振る。

「知りませんね。なんですか、それは」

「コーヒー豆だよ。ジャコウネコのフンから取れる貴重な物だ」

それを聞いて、私はタイミングよく口に運んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。

「フンってフン？ つまりクソのことですか？」

「そうだ、クソだ」

男は面白そうに笑った。しかし私はちっとも面白くない。コーヒーを飲む気も失せた。

「わけが分かりませんね。猫の糞から出てきたコーヒー豆の何が貴重なんです」

「猫ではない。ジャコウネコだ。ジャコウといえばまたの名をムスクと言い、甘く魅惑的な香水の材料でもある。2つを結びつけているのは香りだ。つまりジャコウネココーヒーとネココーヒーとは全く印象を異とする」

印象などはどうでもいい。話が核心に近づかずに、私はイライラと言った。

「で、その香水の材料から出てくるコーヒーはジャコウの甘い香りがするとでも？」

「そうではない。コーヒーの実を食べたジャコウネコの腸内で、消化されなかったコーヒーの種子、つまりこれが一般的にコーヒー豆と言われるものだが、発酵されて香りに風味を添えるというのだ」

最初に飲んだ奴が何を思って飲んだのかは分からないが、えてして珍味とはそういうものだろう。私は先を促した。

「で、私への仕事とはそのジャコウネコを狩ってこいとでもいうことですか？ でしたらお門違いですね。狩りは狩りでも私の専門は動物ではない」

「むろん、わかっている。君に依頼したいのは偽コピ・ルアクの検挙だ。高価なものだけに、紛い物が多く出回っている。それこそ、本物以上にな。その出処を突き止めてほしい。おおよその場所は特定できている。治安は決して良いとは言えず、そこで必要となるのが君の銃の腕ということだ」

白衣の男はそう言って、封筒から地図が描かれたメモと、数枚のフィルムを取り出し、私の前に並べた。

バラックのような建物の前に、上半身裸の男たちが集まっている写真だ。東南の方だろうか。それらを手に取りながら皮肉な口調で私は言った。

「偽でも本物でも当人が知らずに美味しいと思ってるんなら、それでいいんじゃないですか」

「そういう訳にはいかない」

男は苦笑しながら言った。私は立ち上がる。

「ま、仕事ですからありがたくお受けしますがね。詳細は事務所に帰ってからまた連絡します」

そう言って、部屋を出る。くだらない仕事だが、得意先を怒らせるわけにもいかないだろう。

本物と偽物にどれほどの違いがあるのか。

私は本物なのか。殺し屋として生きている私の人生は本物なのだろうか。

——当人がそれで良ければ、それでいいか。

私は考えるのをやめた。

## さらば、第三惑星

しゃん

東京都足立区に現れたモノリスは、その後、三日間経っても環七上空に浮かんでいた。大きな乾板フィルムのようなそれは、黒い光沢を放ち神々しいが、周囲の人々は戸惑っていた。「ちっ、あの野郎。面倒なことしやがって」

自宅のテレビを眺めながら、ヒ・ヤトイ・クーンは天井を仰いだ。モノリスは、ヒ・ヤトイ・クーンの同胞だ。美食家で知られる彼ら異星の住人は、銀河を旅して回っているが、殊更に地球の食べ物に対する評価は高い。

特に発酵食品との出会いは、宇宙誕生をはるかに超えるインパクトだった。どのような知的生命体も考えつかなかった製法だ。地球という環境の中でしか為しえない、まさに奇跡と表しても過言ではない食品だ。希少な鉱物のようなそんな食品が無数にあるばかりか、食べ物をはじめ飲料や調味料など多岐にわたる種類が作られている。そもそもヒ・ヤトイ・クーンは、納豆に魅了され、この惑星に定住していた。自宅の冷蔵庫には、タッパーに入った大豆が常時ストックされている（実話）。

しかし、美食家であるのは彼らだけではない。自宅を出ると、ヒ・ヤトイ・クーンは電車に乗り、竹ノ塚方面へ向かった。モノリスはもともと人間の姿をして、この星の住人に紛れ込んでいたはずだ。それがどのようなわけか、本来の姿に戻ってしまった。

再び人の姿にしなければ。電車のシートに座るヒ・ヤトイ・クーンの顔は、雪山で遭難したように青ざめ、血の気が失せていた。モノリスの表面には、昼定食 320 円とある。あたかも社員食堂で使われる食券を彷彿とさせるが、それは地球人の顔と同じ役割を持っていた。ヒ・ヤトイ・クーンの場合は、そば 190 円だ。つまり、環七上空に浮かぶモノリスは自らの素性をさらしていることになる。

まずい、奴らが狩りにくる。絶望の縁に立つヒ・ヤトイ・クーンの耳に、空の彼方から聞こえる悪魔の音が響き渡っていた。らーめんつけめんぼくいけめん。

大食漢で知られるエイコー星人だ。美食家であるヒ・ヤトイ・クーンたちの存在をかぎつければ、食い意地の張った彼らが現れるのは当然のことだった。

銀河の一部ではとっくに忘れ去られたエイコー星人のフレーズを、ヒ・ヤトイ・クーンは何度も耳にした。

彼らの声は、次第に大きく、そして陽気になっていく。

この星は、もう終わりだ。

ヒ・ヤトイ・クーンは、途中で電車を降りると、スーパーに立ち寄りありったけの大豆を買った。

昼定食 320 円め、この借りはいつか返してもらおう。

発酵食品が作れる星へ。板チョコのような巨大な物体が、もう一体空に浮かび、そして消えていくのを足立区の人々は不思議な顔で見届けた。

投稿時刻 : 2013.10.18 23:45

最終更新 : 2013.10.19 00:17

総文字数 : 2818 字

獲得☆ 4.222

※制限時間後に投稿

《時間オーバーも何らかのトリックで賞》  
趣味は意外な形で身を助ける  
るぞ

「朝早く、突然で本当にすみません」

「いえいえ。アキラからよく貴方のお話は聞いてましたよ。どうぞ、くつろいでください。ここはアキラの部屋でもあるんですから」

「失礼します」

ふわふわとした茶髪を翻して、女は僕をリビングに通すと、温かい緑茶とガラスの器に盛られた、ヨーグルトとバナナとジャムの盛り合わせを持ってきてくれた。

「今しがた起きたばかりですみません。慌てて服を着て、それで何も用意できなくて。せめてヨーグルトどうぞ。趣味の手作りなんで、出来があまりよろしくないかもしれませんが」

「そうなんですか。あ、いえ、えっと、いただきます」

「えーっと……」

「サトシです」

「そうでしたそうでした。時々話に聞いていますよ。アキラの弟さんなんですよね」

「貴方は、その……別に兄さんの恋人ではないんですよね」

「ええ。ただのハウスシェアなんですけど、よく同棲と間違われますね。まあいい年頃の……って親はよく言いますが、どうなのでしょうね。自分では賞味期限切れだと思っていますけど。とにかく、まあ親が言うところのいい年頃の男と女が一つ屋根の下に暮らしていたら、そう思われやすいのでしょうか」

年上には違いないだろうが、僕が目からでも十分若く見える女は、苦笑いしていた。

そんなことはありませんよ、と普段なら世間話に興じるところだが、今はそれどころではなく、僕は彼女に本題を切り出した。

「実は……その、貴方をお願いしたいことがあります」

「为什么呢？」

「その前に確認したいのですが、貴方がここ数日で、家を空けたのは、3日前から一昨日までの一泊二日の旅行中の間だけだった。それは間違いありませんよね」

「……ええ。旅行から帰って以降、私が記憶する限り、家を出ていないのは確かですね。ひよっとしたらコ

ンビニくらいには行ったかもしれませんが」

「ですが、たとえば部屋がこんなに散らかって片付けられるまでの間、まったく気づかないほど、長い期間を家をあけてはいるはずはない。間違いありませんね」

僕は取って置きの写真を、女の目の前に差し出した。

僕が今通されているこの部屋で撮った写真だ。僕と兄さんが、酒瓶を散らかして飲みながら、自分取りしたものだった。

「そうですね、私が記憶する限りでは。アキラから聞いたんですか？」

「はい。それと写真に写っている、部屋の隅のこのくまのぬいぐるみは、あなたが旅行に行かれる前日に、兄さんが買って来たものだと聞いています」

「それも間違いありませんね」

「ということは、この写真は間違いなく、貴方が旅行中に撮られたものだ。貴方はそう証言できますよね」

「どういうことですか？」

「実は、一昨日の朝、北海道にある、俺の家の近くで、恋人が殺されたんです。まだニュースにはなっていないけれど。大喧嘩した後で、警察はきっと俺を疑うはずですよ。でも俺、一昨日の朝に北海道になんていないですよ。そりゃそうです。兄さんとここで酒飲んでたんです。潰れるまで」

思い当たる節があるのか、女はまたもや苦笑した。

「まあ、アキラは人を酒で潰すのが上手いですからね。本人に悪気はないみたいですが、あれで何人もの女の子をホテルに連れ込んだ、ちょっとした狩りだって豪語してましたよ。それが彼の趣味なんでしょうね。私には流石に手を出しませんでしたけどね。変にもめて、ハウスシェアできなくなったら困るからなんでしょうが。それにしてもアキラは、私がいけない間に貴方を呼んでいたわけですね」

「そうです。俺の家の近くは田舎で、交通機関もほとんどなくて、下手な外国よりもたどり着くのに時間がかかるんです。とてもじゃないですけど、貴方の旅行中に東京にいて、一昨日の朝にあのあたりに帰るのは無理なんです」

「つまり貴方は私に……」

「証言して欲しいんです。アリバイを。兄さんにはもう相談しています。でも兄さんは身内だから、裁判では身内のアリバイ証言は参考にされませんから」

「……でもこの写真、最近なら色々パソコンで加工も出来るといいますし、右下の日付もつけずに撮られたものようですし、本当に正しいものなのかどうか……」

「フィルムがあります。デジタルじゃなくて銀縁で取ったんです」

「いまだき珍しいですね」

「まさかカメラ小僧の趣味が、こんなところで役に立つ日が来るとは思いませんでしたけど」

「趣味は意外な形で身を助けるものですね」

「まったくです。それであの……お願いできますか？」

「そうですね……。ところで、今アキラはどこに？」

「警察に呼ばれてて……俺のことで。でも今日中には戻るはずですよ」

「今夜私を飲みに連れて行ってくれると約束していましたからね」

「聞いてます。きっと戻ってくると思います。あの……それで、俺のアリバイを証言はしてくれるんでしょうか？」

女は妙に意味深な目で僕を見つめて、少し間を空けてから口を開いた。

「そのヨーグルト、私が寝る直前に準備したものなんです」

「はぁ……？ おいしかったです」

「おいしかったですか？ 不思議ですね。こんなに早く発酵するはずないですよ。今の時期だと丸一日くらいかかるんです」

「!？」

「そういえば、アキラは昔不眠気味で、バルビツール系の睡眠剤を処方してもらっていた時期があったといっていましたね。あれ相当強烈な奴ですよ。まだ、あの引き出しの中に残ってるんですよ……ええ、あなたとグルで私をだまそうとしたアキラが、昨日私の晩御飯に混ぜたんでしょうね。ああ、昨日ではありませんか。私が昨日だと思っている日は、実は一昨日ですよ。まだ私は日付を確認してませんが、この写真、私が睡眠剤で丸一日寝ている間に、つまり昨日撮ったんですよ？ 二人で。殺人が起こったのは、一昨日ではなく3日前。ギリギリ来れるんじゃないですか？ 昨日には。この家までに」

僕はとっさに彼女につかみかかろうと立ち上がった。

が、どういうわけか足がもつれて倒れこんでしまった。起きようとしても、体が上手く動かない。

「もちろん、私がニュースを見たり、バイト先へ出かけたりすれば、いずれは日数のずれが発覚するでしょうね。それに対してあなたとアキラが何の対策も立ててない、ってことはありえないわね。多分、今晚飲みに行った時に、アキラは私にお酒を大量に勧めて、酔い潰す予定でしょ。そして翌日起きた時に、アキラが何食わぬ顔で私に言うのよね。『君は丸一日起きなかったんだよ。酔いつぶれて一日寝過ごしたんだ。もう二日目の朝だよ』って。これで時間のずれは埋まるもの」

倒れた僕を見下ろしながら、女は淡々としゃべり続けた。

「ええ、もちろんそのヨーグルトには私も入れましたよ。あの睡眠剤を。変に暴れられても困りますしね。まったく、本当に『趣味は意外な形で身を助ける』ものですね」

彼女が――警察へ通報するためだろう――ゆったりとした動作で、電話の受話器を取り上げる姿をかうじて僕のまぶたは写していたが、そこで僕の意識は途切れたのだった。

投稿時刻 : 2013.10.19 01:37

総文字数 : 3892 字

獲得☆ 4.000

※制限時間後に投稿

## 神の水

永坂暖日

男手でなければ動かせないような大きく厚く、重い扉を開けたのは、一人の男だった。

今宵は晴れているのだろう。扉が開いたことで、松明の炎しかなかった洞の中に、柔らかな白い明かり差し込む。しかしそのせいで、ラキが振り返っても、逆光となって男の顔は見えなかった。

「お前が、《神水の巫女》か」

張りのある声で、男が若いと知れた。とはいえ、今年で十七になったラキよりも歳は上だろう。この国では、十六で成人したとみなされる。しかし、ラキが籠もるこの洞穴は、十六の男が――大人の仲間入りを果たしたばかりの若者が簡単に近付けるような場所ではない。

ラキの一族が住まう村からここまでは、歩いて一日以上。しかも、道らしい道はなく、案内がなければ簡単に迷ってしまい、やがては森に住む動物たちの餌となる。なんとか洞穴までたどり着いても、入り口を守る見張りが――もちろん武装している――が二人、いる。彼らの許可がなければ、この扉は開かない。

男が、見張りの許可を得て扉を開けたとはとうてい思えなかった。手には、何かが滴る剣を携えていて、そしてその足元には、倒れている人らしき影が見えるのだから。

もとより、こんな時間に扉が開くはずがない。ラキが扉の外の景色を見られるのは、食事を差し入れられるときと、材料を運び込むとき、そして、できたものを運び出すときくらいのもので、そのいずれも、こんなに月が煌々と輝く夜にやることはない。

「あなたは？」

男が外部の者であるのは明らかだ。ラキは男の問いに答えなかったが、見張りを殺してまで扉を開けた以上、ここで何を作っているのか、ラキが何者なのか、分かっているはず。

「訊かずとも、分かっているだろう」

男が鼻で笑う。その通りだ。ラキもまた、男が何者なのか、見当はついていた。

「《巫女狩り》のフィルムダ」

逆光で、男の顔は未だ見えない。だが、男の雰囲気から、口元に笑みを浮かべたような気がした。

「ならば、俺の用件も分かるだろう――出せ」

血の滴る切っ先が、ラキに向けられる。男が数歩踏み込まなければ、ラキには届かない。しかし、ラキが逃げるよりも、男が踏み込んで切っ先が彼女の体を貫く方が先だろう。ラキは、蒸留器を前に座り込んでいて、それがあつたために、ここより奥には逃げ込めない。もっとも、逃げ込んだところでたいして奥深い洞

穴ではないから、逃げられる距離はたかが知れている。

「あなたには渡せない——そう言ったら、どうするのですか」

「斬る。斬って奪う。それだけだ」

訊かずとも、男がどうするつもりかは分かっていた。なにせ目の前にいるのは《巫女狩り》の異名を持つ男なのだ。

ラキは、神水を作る巫女だ。森の奥深く、限られた条件下でだけで育つ穀物を発酵させ、そこに清らかな水を加える。それを蒸留して得られるのが、神水と呼ばれる、特別な酒だ。詳しい製法を知っているのは《神水の巫女》と呼ばれる女たちだけ。ラキもその一人で、先代の巫女から、じっくりと時間をかけて製法を教えられた。

神水を口に出来るのは、この国の王だけだ。それ以外の誰も、飲むのは許されていない。神水には、不老長寿の効果があるとされているのだ。現に、歴代の王は、暗殺された場合を除き、いずれも長寿である。

神水の原料である穀物は、本当にごくわずかししか採れない。そのため、栽培条件が適している場所に、それを守り育てるための一族と、神水を作るための巫女がそれぞれいる。

そして、その巫女を殺して回っているのがラキの目の前にいる男、《巫女狩り》のフィルムーダである。彼の目的は明らかでないが、神水の製法を知る巫女を殺しているのだから、神水をなきものとし、王の長寿を阻むのが狙いなのだろう。

《巫女狩り》と呼ばれるからには、ラキ以外の巫女たちは、フィルムーダに神水を渡すの拒んだのだ。

神水は神聖なるもの。賢明な王を長らえさせ、国と民を守るためのもの。

先代からそう教えられ、それを守ってきた。代々の巫女の教えを守り通そうとして、会ったことのないラキの仲間は、この男に屠られたのだ。

ラキのそばには、蒸留前の神水が入っている陶器の壺があった。蒸留前なので、厳密に言えば、この洞穴に神水はない。しかし、それをフィルムーダに教える義理もない。

ラキは壺を引き寄せた。男の視線が、そこに向くのを感じる。

「それか」

「——神水を奪って、それであなたはどうするつもりなのです」

「長寿の王など不要だ。王を長寿にする、その術も」

切っ先が、幾分ラキに近付いた。

神水を渡したところで、どうやら助かるものではないらしい。《巫女狩り》と呼ばれるだけはある。

「今まで奪った神水は、では、あなたが飲んだのですか」

「誰が飲むものか。人を不老長寿にするなどと言う、怪しげなものを」

「——これに、それほどの力はないのですよ」

ラキは壺の縁を指でなぞった。フィルムーダが目を瞠ったのが雰囲気分かる。

微笑を浮かべ、ラキは殺気を放つ男を見上げた。

「材料はごく限られた条件でしか育たぬ穀物ですが、できあがるものは、ちまたで売られている麦酒と大差ないものなのです」

酒は百薬の長などというが、飲み過ぎれば体を害する。神水にしても、それは同じだ。その点では、そこらにある酒と変わらない。原料と製法が特別なだけなのだ。

「飲んで、みますか？」

ちょうど近くに、ラキが水を飲むのに使っている杯があった。それを引き寄せる。

フィルムーダの剣先が、かすかに揺れる。

「そう言って、毒を飲ませるつもりか」

「まさか。これは正真正銘、王に捧げる神水です」

ただし、蒸留前の。胸の中で呟き、壺の中身を杯に注いだ。

「これまで、神水をあなたに勧めた巫女はいないでしょう」

杯を、フィルムーダに差し出す。男が一步踏み込み、剣先が、杯を弾き飛ばした。

「ああ、いない。何故、お前は勧める」

「効果を、あなたに知ってほしいのです。神水の効果も知らない、あまつさえ怪しげと言う者に殺されるのは、巫女たちが哀れと思いませんか」

飛ばされた杯を拾い、埃を払い落として、壺の中身を新たに注ぐ。

「毒と疑うのなら、わたしが先に飲んでみせましょう」

ラキは言って、杯の中身を一息にあおった。空になった杯を、静かに地面に置く。

「これで、疑いは晴れましたね？」

フィルムーダの返事はない。しかし構わず、ラキは壺の中身を注いだ。そして、それをフィルムーダに差し出す。

男の、剣を持っていない方の手が、ゆっくりと杯に伸びる。

顔に近付け、まずはにおいを嗅いでいた。

蒸留前の神水は、穀物を発酵させてできた酒精の、纏わり付くような甘いにおいがかすかにする。酒をたしなむ者ならば、それが毒のにおいでないと分かるはずだ。

フィルムーダはおもむろに、杯に口を付けて傾けた。すべては飲まなかったらしく、中身の残る杯を投げ捨てる。

「確かに、毒ではないようだな」

それから、壺に目を向けた。

「ここにある神水は、それがすべてか」

「はい」

「よこせ」

言われるがまま、ラキは一抱えあるツボを、フィルムーダの方に押し出す。八分目ほど入っている。フィルムーダはその壺を蹴倒した。中身が零れ、男の足元に染みが広まり、洞穴の中に酒精のにおいが充満する。酒に弱い者ならば、このにおいだけで酔うかもしれない。

「あとは、神水の製法を知る者だけだ」

フィルムーダが低い声で言う。ラキは己に向けられた剣先を見、それから、男を見上げた。

「たとえ神水がなくなろうとも、王は存在し続けます。なのに何故、王ではなく、神水をなくそうとするのですか」

切っ先がゆっくりとラキに近付いてくる。しかし、ラキは男から目を離さなかった。

「いずれ、王もなくす。神水をすべてなくしてから」

冷たく鋭いものが、ラキの喉元に触れた。ちくりとしたあとに温かいものが肌を伝う感触で、わずかに斬られたのだと分かった。

「それは、きっと無理でしょう」

「なに……？」

男の体が大きく傾いで、倒れる。遮るものがなくなり、洞穴の中は月明かりでいっそう明るくなった。

「あなたの《巫女狩り》も、ここでおしまいです」

ラキはすっと立ち上がり、男の顔のそばに膝をついた。

フィルムーダは飛び出しそうなほど目を見開き、ぜえぜえと荒い息を吐いて、口の端から泡を吹いてい

る。

「どく……ではない、と」

「壺の中身は、正確に言えば神水になる前のものです。あれを蒸留せねば、神水にはならないのです。蒸留前の神水には、毒となる成分が入っているので」

「なぜ、おまえは」

ぎょろりと見開かれた目がラキを睨む。目は血走り、息遣いは不規則で、荒い。杯の中身をすべて干さなかったとはいえ、長くは保たないだろう。

「《神水の巫女》にとっては、蒸留前の毒が含まれている状態であっても、毒にはならないのです。神水の出来具合を確かめるため、幼いうちから、少しずつ口にしているので」

ラキが、先代の巫女に跡継ぎと指名されたのは七つのとき。その時から少しずつ、蒸留前とその後の神水を口にしてきた。神水の出来具合を左右するため、蒸留前の方をより多く口にしていた、歳を重ねるごとに、その量は増えていった。今ではすっかり慣れて、常人であれば一口二口でフィルムードのような状態になるが、ラキは杯になみなみ注がれたものを飲んでも、なんともない。

「わたしの作った神水、お味はいかがでしたか、《巫女狩り》のフィルムードどの。味が良いと、王に誉めて頂いたことがあるのですよ。今回は、今まででいちばんの自信作でした」

しかし、フィルムードの返事はなかった。息はまだかろうじてしているようだったが、口からは血の混じる泡を大量に吹き、目の焦点はどこにも合っていなかった。

## 関連作品のご紹介

---

今回再び、てきすとぼい杯の連動企画をしゃんさんが開催してくださいました。  
第10回てきすとぼい杯参加作品の続編・後日談のような2作品が投稿されています。

勝手に連動 第10回ぼい杯スピンオフ賞（土日版）

<http://text-poi.net/vote/36/>

よろしければ、これらの作品もあわせてお楽しみください。

※他にも関連作品がございましたらリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

## 終わりに

---

第 10 回てきすとぼい杯、お楽しみいただけましたでしょうか。

ここ数回、単一テーマのお題など、制限・制約の緩い回が続いていたこともあり、今回はしばらくぶりに三題で、「発酵」「狩り」「フィルム」とさせていただきました。

三つの語それぞれに接点が少ないこともあってか、開催時には「非常に難易度の高い回」「時間が足りない」「今回は（作品の出来が）ダメダメ」との発言も多く聞かれました。

……が、これは作品中にお題三つ分のエピソードを盛り込まねばならないということでもあり、作品の内容的にも字数的にも、ここ数回の開催中で最も充実した回となったように感じております。

その結果と申しますか、今回は獲得☆票の平均が全体として非常に高く、なんと 16 作品中 10 作品までが☆4 以上と、審査結果を見ましても大豊作の回となりました。

——最後になりますが、今回もそれぞれに工夫の凝らされた読み応えある作品を、多数お寄せくださった作者の皆さま、また、投票・感想・チャット会にご参加くださった皆さま、……そして今回、久しぶりに連動スピンオフ賞を開催してくださったしゃんさんに、この場を借りてお礼申し上げます。

てきすとぼい杯は、来月からまた土曜夜に戻りまして、毎月中旬に開催予定でおります。

お時間ございましたら、またぜひ、投稿にも審査・感想へも、お気軽にご参加くださいませ。

2013 年 11 月 10 日  
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、2013 年 11 月 16 日 (土) 開催の予定です。



作品集電子書籍を  
Puboolにて頒布中。

# 言葉の茂る 樹が育つ。



概ね実話です

作者さんの作品解説  
聞きたいですね

蜜柑の匂いが  
してくるようですね

恋愛系の作品が  
多かった印象

若干テーマの  
ぶれのようなものを  
感じました

ほのかなえろすを  
感じました

ラノベタッチな  
感じで軽快で  
みやすい

この世界観で  
300枚くらい  
書いて下さい

競作・共作  
テキスト創作サイト

**できすとぽい**  
**text-poi.net**

前衛的ですね。  
私も結構こういうの  
好きです

読んでいて時々、  
すごく言葉が刺さったり、  
強く共感してしまったり

こういうのこそ、  
Kindleで出版したら  
いいのに

よくあるパターン  
なだけで  
「ベタだなあ」と  
感じさせない筆力

読んで  
ドキドキ  
しました……

このお題消化法は  
正直やられたーと  
思いました

予想外の結末に、  
「ええっ!？」って  
声出ちゃいました

適度な緩急、  
リズム感があって  
とても良かった

なんか直すと他の  
ところのバランスまで  
崩れちゃうような

できすとぽいは、競作や共作を支援する  
テキスト創作サイトです。一人ひとりのウエブ  
作家たちが、競作・共作を通じて結びつき、  
感想やアドバイス、採点などをかわしながら、  
よりよい作品を創ることを目指しています。  
作家同士が言葉を交わしあい、言葉のやり  
とりが豊かに茂り広がっていく。そんなサイ  
トにあなたも参加して、一緒に創っていきま  
せんか？  
いまはまだ、小さく芽吹いたばかりですが、  
いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集  
〈第10回〉

<http://p.booklog.jp/book/78999>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78999>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78999>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブクログ



てきすとぼい杯